女學雜誌

一冊六錢

各土曜日出版

第百七拾七號

當府内無郵税

郵税一錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 177. August 31st, 1889.

EDITORIAL:—Idealism and Realizm in Novels.

LEADING ARTICLE:— A Word for the Petition Concerning Monogamy.

CRITICAL NOTES:—"Imosegai."

MISCELLANEOUS:— The Heart of the Daisy. Child-training of Today. A Poem. Disappointments in Life. Difficulties. About Famous Authors and their Books.

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

HISTORICAL RECREATIONS: — Charles Dickens (IV).

NOVEL:—"Shinsaishi" (concluded).

GENERAL NEWS.

FOREIGN NEWS.

第百七十七號目錄

社說　小說論略

論說　一夫一婦の建白に付きて辯ずる所ろあり（植木枝盛）

批評　さゞなみ山人の妹脊貝

雜錄　花心の歎〇日本現今の小供〇現今女修身いろは歌〇失意〇行路難〇名著作年月

笑草

見鑑

史傳　チャーレス、ヂッケンス傳（第四）

小說　眞才子（瓶濬居士）

寄書　婚姻の目的〇林中靜流

新報　啞然たるもの三〇印刷局王子工場患者統計〇婦人惡風雜誌の新編者〇東京開市三百年〇蛙、雀、地震、山林〇清國人の義捐〇公園〇佛國女權會

外報　驛遞女局長〇クラ丶、バートン〇トルストイ夫人

片々　田村武治氏〇水野粲子〇神戶の景況〇其他

WOMEN IN JAPAN.

(1) *A short life of Mrs. Ito Matsumoto together with extracts from her private letters (mostly to her husband) edited by the Rev. M. Hoshino, has been published by "Woman's Magazine Office." Publishing private letters is a new departure from Japanese usages, but they have already been read with admiration as showing the difference of sentiment the Christian lady entertained toward her husband compared to what is usual with her uncultured sisters.*

(2) *Mrs. Toyoju Sasaki is planning another Industrial school for the independent support of girls. We can not but congratulate new endeavours in this line.*

(3) *500 applications have been received by the Art Academy of Ueno. Next month's entrance examination will admit 135 of them.*

(4) *Another magazine for women and a 3rd is being published by the Buddhists. It is called "The Woman's World," and aims at moral culture.*

(5) *There are already three Christian Kindergartens in Kobe and Hyōgo. A 4th and a larger and completer one is to be instituted with Miss Howe at the head.*

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第十二卷 第百七十七號 明治二十二年八月三十一日

社説

○小說論略

一　小說、小說家

今日の文學社會にて、書卷の最とも多く出版せらるゝは小說なり、即はち是れ小說を讀む人の數最とも多き徵證にて、隨ひては評判の最とも多き、批評の最とも多きなど皆な小說にてあらんと思はるゝなり、此を以て年少男女にして早くも意を小說家たらんとに决し、夙とに其の名著作なりと信ぜらるゝ所ろのものを世に出して、密かに世評の温冷何如があらんと掛念せらるゝもの多し、而して斯る新小說家中には、未だ嘗て八犬傳すら通讀したるとあらずして直ちに筆を揮るひ、慨然自から許して四方の志あるもあれど、凡そ如此きは多くは田舍地方の戯作者なり、若し夫れ都門に於て近時大ひに其名を喧しくしたる人、又は此等の人の著作を批評して廣ろく英米獨佛の小說に標準を求めらるゝの學士に至りては、其の内外の小說を讀めると蓋し數十百卷に超え、博覽多識にして世を見ると鷹よりも横柄なり、曰く小說とは必らずや如此きものなり、曰く小說家とは必らずや如此きもの也と、其論證甚はだ博ろくして意見ますく狹まし、其見識極めて西洋風にして議論いよく陝るし、吾人の如きは小說に付きて恐らく門外漢の地に立てり、而して自から讀めるの小說も亦た甚はだ僅かなりと云へども、抑そもすでに傍觀者なるが故に偏見に陷ゐるの患ひ割合に少なく、讀むと多からざるが故に迷よひに溺ぼるゝの心配殆んどあるなし、吾人凡理に徵して今日の小說、小說家なるものを考ふるに、心に落ちざる所ろ至つて多し、世正しきか、吾人誤まれるか、密かに世の博識に質して抱腹絕倒するともなきに非ず。

二　實際派

小說に實際派とか云ふものあるよし、之に旨とする所ろは人事社會の實際を寫し、勉めて人情の有のまゝを穿がつに在ると聞く。　然らば此は地理學の土地を觀察して其實際を寫す如く、天文學の星晨を觀察して其現象を穿つ如きものかと云ふに、曰く然らず、此は科學にして彼は美術なりと云ふ。然ば歷史の古今の治亂盛衰を寫す如く、傳紀の人の氣質履歷を穿つ如きものかと云に、曰く然らず、此は實事にして彼は戯作なりと云ふ。然らば即ち其所云る實際なるものは抑そも何事の

謂ひか。一小說全篇の結構すでに戯作より成る、夫れ全体の運命すでに實際にあらず而して其の各部分に於て能く悉とく實際に合するを得る乎。吾人西國の小說家を見るに、其雄名あるものは多くは想像に富めるものなり、夫れ苟くも實際を寫すに止まらば先づ觀察力をのみ大切とすべし、而して其の想像豐富にして初めて名著作を出したるを知らば、其著作や必らずしも想像の果たると多からずんばあらず。且つ若し小說にして果して美術なる歟、而して美術は之を想像によりて製作するものとするも、若くは自然の美を綜合して之を綴作するものとするも、或は彼の某氏が堂々として吾人を罵られたる如く、抑そも自然の垢を燒盡して其美粹を集めたるものとするも、其要必らずしも自然の儘、實際の儘を寫すものにあらざるや明らかなり、然れども小說は美術の一つにして此美術や專はら世の實際を寫さゞる可らずと云ふ、如此の美術は抑そも何國の美術なりや。又若し小說にして人の快樂に供ふべきものとせば、即はち其能く人の心を喜こばす所の小說は既でに小說の目的を達したるものなり、而して人は大率ね實際に超るの事を想像して愉快を感ず、茅屋の民は富まんヿを思ひ、君子は聖ならんヿを思ひ、信ずるものは天國を理想す、然らば此書の最大最高なる人情に應じて能く其の望みを滿足せしむるものは、抑そも何によりて小說たるを得ざる乎。

三　理想派

實際派に對立する所ろのものを理想派と云ふよし、而して此派は必らずしも自から名乘りて事々しく其黨名を揭ぐるに非ず、多くは後進の實際派に表目せられて敢て自から許し理想派と云ふのみ。然れども吾人は彼等が何によりて實際派と分別し、敢て特更らに理想派と云へる名號を專ばらにするやを知らず。抑そも狂人愚者にあらざるよりは、一人の理想する所は亦た他人の能く理想し得る所ろにあらずや、而して彼の人此人の能く理想し得る所ろのものは豈に亦た人間の通情にあらずや、人間の通情を寫すもの果して實際にあらざる乎。且夫れ人は其世間外に特出するヿ能はざるもの也、たとひ孔子ソクラットは當世に於て非凡なりと見へつるも、吾人千歲の下に於て彼等を覗ふに、彼等亦た希臘時代、春秋時代の產物たるに過ぎず、然らば則はち、人何如なるヿを理想すと云へども、其理想にして遂に當世の人情に合はざるもの甚はだ少なし、すでに彼等の理想能く人情に合せり、而して彼等何によりて實際にあらずと云ふ乎。且つ夫れ理想は多くは實

際の先驅なり、吾人先づ理想して而して後ち彼處に至り、一國先づ理想して而して后ち彼處に至る、故に之を理想するの時に於ては未だ之を實際に見るとあらずと云へども、既に來るの後に於て之を眺むれば理想共和國遠く過去に屬するとあり、然るに理想の未だ成らざるを以て之を實際と爲すとを得ずんば、事業の未だ成らざるものは果して實際の人事にあらざる乎。吾人遂に理想と實際との別を知らず、否な其別を知らざるにあらず、小說の理想、實際、と云ふものに至りては遂に其別あるを知らざる也。

四　人間及世界

請ふ見よ、地球は茫々たる宇宙間の一小躰なれど、其表てに現はれ來る盛衰興敗は千古に渡りて盡きず、而して此一小躰に棲息する人類大抵十數億あり、彼等皆な其面の異なる如くに其心を異にし、其面偶ま似たりと云へども心全く變じ、億にして既に兆の人心あり、而して人心は上に望み見て天の高きを測り、下に伏して地の深きを察し、古へに鑑がみて無數の古人を友とし、未來に想像して幾百億の出來事を思ふ、若し其の働くときは變幻出沒して人彼自身も之を覺らず、飄々として三千天に逍遙し、窮極する所ろを知らず、彼夢みるときは或は蝴蝶に化し、或は木石となり、或は天路を經歷し、或は地獄に入る、世界すでに廣ろく且つ久し、人類すでに多く且つ從るし、人心に至つては實に無數、無限ならんとす。而して、今の小說家往々、愛情、婚姻、下宿屋、演說、政治界出世などの事を寫して之れ既に實際を盡せりと云ひ、而して他の大いなる想像、高き理想、非常なる結構を見て、之れ實際に非ず、小說に非ずと云ふ、喩へば蛤蜊を以て大海の水をすくひ、天下此の外に水なしと云ふが如し。

三

五　自由國の現象

凡そ專制國の習僻として、民の職業を限り、階級を限り、此の無數無限なる天の子を縛りて、僅少なる人爲の箱段の上に制置するとあり、此に於てか、士農工商の別起り、希臘羅馬の士民斑別なるもの起り、印度のカーストなるもの起り來れり。然れども如此きは限りあるの制限を以て限りなきの人を制したるもの也、僅々なる四五の區別を以て億兆の人を分類したるもの也。其れ草木すら之を分つときは十數百の種屬あるべし、然るに天地間尤も變化多く、尤も異種類多きの人間を區別するに、士にあらずんば農なり、工にあらずんば商なりと云ふ、何の愚か之に若かん。而して世いよ〳〵開け

て人類いよ〳〵複雜し、人類いよ〳〵複雜して市民の區別法なるもの漸やく擴張す、然れども其の區別法の更にます〳〵擴張して、凡そ天下に人あるの數に隨つて職業階級の數あるに至らずんば未だ可ならず、夫れ社會の組織單泊なるときは漠然として學者と云ひ、事業家と云ひ、小說家と云ひ、新聞記者と云ひて、其職業別すでに判然たるべし、然れども世更に開らくるに至れば、學者の中ちに其學者ある丈けの專門學者あり、彼等の專門皆な別にして其長ずる所ろ亦各別なるものあらん、如此く、事業家も、小說家も、新聞記者も、皆な其の人數ある丈けに異種の專門なくんばあらず、此れ文明の配劑する所ろにして、實に自由國の現象ありとす。

而して束縛を受くると更にあるなく、時世に頓着すると更らにあるなく、只だ其想像の行くに任せ、只だ其の筆の走るにまかせ、不羈獨立にして早く自由國民の体裁を備ふるを得るものは豈に小說家にあらずや、而して其の小說家の小說界に住ふの眼識何んぞ狹隘なる、啻に其眼識の狹隘なるのみにあらず、他の放逸高奔するものを見て、驚歎し異常とし、之れ實に小說家にあらずと云ふ、何ぞ其の金魚の大海に泳ぐに似たる。

六　最良の小說、最良の小說家

然らば則はち、小說家には素より馬琴リチヤードソンの如きもあるべし、一九マークトエンの如きもあるべし、西鶴ヂツケンスの如きもあるべし、春の舍サツカレーの如きもあるべし、二葉亭トルストイの如きもあるべし、嵯峨の屋ツルゲネーフの如きもあるべし、龍溪スコットの如きもあるべし、此諸君皆な小說家なりと自信せらるゝ如く、果して小說家にてあるべし、たとひ其小說は勸善懲惡に偏するとも、諧謔滑稽に僻するとも、精緻隱微を旨とするも、人情實際を專一とするも、心理的を第一とするも、批評的を第一とするも、結構想像を第一とするも、皆な果して小說にてあるべし。

故に吾人此を見て小說にあらずとし、彼を見て小說なりと珍重するの別を知らず、苟くも人間眞實の想像、觀察、結構に據りて成り、而も文章美に、意匠麗にして、此の實際世間の外に一個の所云る詩世界、小說世界なるものを造立するものあらば、吾人之を呼んで小說家とし、其著作を目して小說と云はざる可らず、而して其の何如なる小說か最良にして、何如なる小說家か最とも良きと問ふものあらんには、能く其小說の目的を達して、高く其專らとする所ろの長所に到着した

るものにありと云はざる可らず、夫れ社會上の職業よりして一視し來れば、官員と手代と、大臣と番頭と固より貴卑輕重あるなし、如此く何如なる小說家も、其小說社會を結構するの技倆に於て若し能く一の長所あるを得ば則はち足れり、何を以てか、彼を貶し此を褒するの理あらん。　然れども、現社會進化の大法により、人類終極の運命により、人情至高の喜樂によりて之を考ふれば、彼の意匠淸潔、道念純高なるの小說、小說家を以て、讀まるゝこと尤も久しく、味わるゝこと尤も深く、益することも尤も大きく、化する所ろ尤も高しとなし、之を以て其最良なるものと爲さゞる可らず。

凡そ局促狹隘なる批評、論定ほど人才を殺ろすものなし、今まや將に起り來らんとするの新小說家、間ま先輩の議論に誤まられて其の天禀の長所を沒するものあり、彼等自から顧みて、如此くばわれ小說家たる能わざる乎と憂思す、其の旣に小說家たらんと决するものも特更らに才を曲げて摸倣せんと欲す、悲しむべきにあらずや。理想派其僻に極まりて實際派起り、實際派跋扈して亦た理想派を絕たんとす、而して其の一盛一衰に隨つて筆を變るもの丶如きは抑そも學者の事か。理想派は陰端に掛り、實際派は陽端に立つ、ともに之れ反動より生じ來たりて均しく中庸の見識にあらず、年少才子須からく固く其の自から立つの地步に立つべし、獨立なくんば一個なく、專殊なくんば優る所ろを見ず、彼の汎々、漂々として東岸、西岸に着くものは新日本の英才にあらず、而して此の英才を殺さんとするものあるに至つては更に歎ぜざる可らず。

論說

○一夫一婦の建白に就きて辨ずる所あり

植木枝盛

東京ある婦人矯風會の賢女子諸君、並に其他の淑女達が自から其の發起人と爲り、自から其の主唱者と爲り、廣く天下の同志を糾合して一夫一婦主義の一大建白書を我國立法の府たる元老院に捧呈することを謀り、或は躬自から廛街の間に奔走して調印を同志の人々に求め、或は書面を東西各地に飛ばして鄭寧に其の旨趣を告白し、往々幾多の障礙あるをも憚らず、斷じて能く之を排し、更らに幾多の困難あるをも怕れず、進んで能く破り、遂に各地の同志者と相ひ前後して一旨一脈其の建白書を元老院に捧呈することと爲りたるは寔とに是れ近來

の、一大美擧にして擊節讃嘆すべきの事とこそ謂ふべけれ、其の一事は乍ち社會の心胸に對して纎小ならざる動機を與ふることを成れり、乍ち社會の神經に對して輕淺ならざる感觸を與ふることを成れり。

此の一夫一婦主義の建白は此の如く近來の一大美擧たるにも拘はらず、間又喃々云々して此事の爲めに一種の異議を挿み、微しく反對を試みんとする者無きに非ざるは何んぞや、吾輩は猶ほ我が大聖大德萬古に冠たる明治天皇陛下の統治し給はるゝ日本帝國に此の如きの儕輩あることを哀むなり、今猶ほ此の如きの儕輩あることを、乃ち明治社會の一大恥辱と信ずるなり。

或る輩は以爲らく一夫一婦は果して正理と謂ふべき耶、唯だ其の男數と女數とは世に於て同數なりと云ふの一現象より推究し來りて一夫一婦を是れ則ち正理なりと叫呼するは未だ疑ひ無きこと能はざる所なりと、吾輩は初めより一夫一婦を人倫の大本なりと立說する者なり、彼の建白主唱者諸姉に於ては曾て吾輩に囑して右等一夫一婦の精神主義に關し公衆の面前に於て一場の演說を爲さしめたることもありたりき、而して吾輩は未だ初めより男女同數の一事を以て一夫一婦の正理たるを證言せざるなり、世に於て男女の同數なるは是れも亦上帝が吾人に向つて一夫一婦の正理たるを默示せられたる一事にてあるべし、吾輩は實に之を信ずることを吝まざるなり、吾輩の立說唱道して一夫一婦を正道なり眞理なりと斷定するものは豈に翅だ是般の一事に維れ憑據して而して之を敢へてするものならんや、世に夫婦と呼び來る一事あり、已に夫婦と呼び來たる一事あれば未だ初めより夫婦と呼べることの根元の道理、正當の意義なきこと能はざるなり、一男は唯だ其の一陽にして諸般の幸福を達することを得ず、一女は唯だ其の一陰にして諸般の幸福を達することを得ず、男にしても、女にしても、唯其の一性にしては後を延ばし嗣を廣ふすることをさへも爲し能はざるなり、是に於て乎一の積極の磁氣者をば一の消極の磁氣者と與して其の幸福を全ふせしめ、一の消極の磁氣者をば一の積極の磁氣者と合して人生の目的を達せしむ、是豈に夫婦と呼ぶることの根元の道理に非ずや、同等の一男は專一の愛情を以て、同等の一女に對し、唯其肉體を合同せしむる希望に止らず、唯其子孫を繁殖せしむる目的に止らず、其靈魂をまで契合一致せしめて、生涯相扶け相保ことを約し、之と相對する所の一女も亦則ち之と相同き精神を以て、希望を以て、目的

を以て、生涯相扶け相保つことを約し、以て他の愛情を交ゆることをも爲さず、他の分子を加ることをも爲さゞる一社を組織す、是れ即ち夫婦と呼べることの正當の意義に非らずや、或は夫婦と呼べることの根元の道理より之を究めん、或は夫婦と呼べることの正當の意義より之を尋ねん、未だ初めより正理の一夫一婦に存在することを疑ふべからざるなり、一夫一婦は即ち是れ正理なりと斷言することを憚るべからざるなり、然るを云はんや、男女の二の者は實に世に於て同數なるに於てをや、而して吾輩は今猶ほ論者に對して左の如き二問を發すべし。

(甲) 人は孰れの人に於ても必ず婚姻すべきものなりや、

(乙) 一男は二人以上の女子を娶て妻とすることを得べきや

一夫一婦の正理を認めざる論者は如何なる答言を呈せんと欲する耶、

(甲) 人は孰れの人に於ても必ず婚姻すべきものなり

(乙) 一男は二人以上の女子を娶りて妻とすることを得べし

是れ即ち論者の答言あらん。

是れ實に抵觸するには非らざる耶、是れ實に兩立せざるには非ざる耶一に於ては曰ふ人は孰れの人に於ても必ず婚姻すべきものなりと、一に於ては曰ふ一男は二人以上の女子を娶て妻とすることを得べきものなりと、今夫れ世に於て男女の同數なることをば論者も能く之を認めたり、男女は世に於て全く同數なるにも拘はらず、一男にして二人以上の女子を妻とする者あるときは傍ら或る所の男子には一人の女子をも妻とすること能はざる者あるを來さんこと必せり、然らば斯の如くする以上には「人は孰れの人に於ても必ず婚姻すべきものなり」と肯定したる一言を殺さゞるべからざるに至らん、而して之を殺さゞらんと欲すれば一男は即ち一女をのみ妻とすべきものなりと換言せざるを得ざるに至らん、抵觸するものにあらずや、兩立せざるものにあらずや。

一夫一婦の正道たり、眞理たることは誠に是れ昭々として睹易き所たるにあらずや、噫汝論者よ、汝實に眼なきにあらず、只だ其の漫々として、汝の臉上を掩蔽する黑雲を拂ひ去ることを急務とす。

或る輩は以爲らく巳に一女を娶りて妻と爲すの男子にして更らに他の女を娶り妻とするにもせよ、他の女を娉して妾とするにもせよ、只だ其男子たる者の働きに於て之を爲すとなれば是れ實に男子たる者の自由に在つて存せんのみ、夫たる者一婦の外に於て更らに二妻を娶るとも三妾を聘するとも、巳

れ能く之を爲すの力あるに任せて之を爲すとなれば婦に於て何んぞ妨ぐるとを得べけんやと、此の如き場合に在りては其の夫たる者必しも其の婦をして餓死せしむるにもあらざるべし、必しも其婦の財産を奪ふにもあらざるべし、必しも其婦の身躰を傷くるにもあらざるべし、只だ其の此の如きの事あらざるのみを以て二妻を娶り三妾を聘するに妨げざるものならしめば如何にも論者の言の如くならん、已に一婦あるの人にして更らに二妻を娶り三妾を聘するが如きは是れ實に夫婦の理を亂り、夫婦の契約を破るものなるを如奈んせんや、夫婦と呼べるとの根元の道理と、夫婦と呼べるとの正當の意義とは已に前項に於て之れを辨じたりき、而して二妻を娶り、三妾を聘する者は縱え一婦を餓死せしめざるも、其婦の財產を掠めざるも、其の婦の身躰を毀つけざるも、乃ち夫婦の理に悖り、夫婦の契約に違はざると能はざるなり、究竟するに其婦を害するものなり、其婦を辱しむるものなり、是を之れ容允す天下何事か容允すべからざるものならん、且つ又試に之を思ふべし、夫にして已れの力能く之を爲し得る以上には二妻を娶るも三妾を聘するを妨げざるとなりと叫呼するならば、婦も亦已れの力能く之を爲し得る以上には二夫を迎ふるも三夫を招くも他より之を妨ぐる能はざるに至らんとす、已に二妻を娶るとを許し、二夫を迎ふるとを許すならば三妻以上十妻百妻千妻万妻之を有するも可ならん、三夫以上十夫百夫千夫万夫之を有するも可ならん、二妻は可なり二夫は可なり三妻は許すべからず、三夫は許すべからず、三妻は可なり三夫は可なり十妻は許すべからず、十夫は許すべからず、十は可なり百は許すべからず、百は可なり千と万とは許すべからずと云ふが如きは抑も論理の立脚すべからざる所なればなり、事若し濫溢して此に至る、猶ほ且つ夫婦と謂ふ所のものあることを得べき耶、只だ是れ野合を恥とせざる饒多の男女が一處に會湊し居るに過ぎざるとと成らん、然るも一向に顧る所あらず、二妻三妾之を娶り之を聘するとを妨げざる者と爲すか、抑も亂言の甚しきものと謂はざるべけんや。

或輩は以爲らく夫婦をして必ず一男一女たるに限らしむれば世遂に子孫を設くると能はずして終る者有るに至らん、是れ甚だ憂ふべきの至りなり、之を思へば寧ろ一夫婦を一男一女と限定せざるこそ事宜に適したるものならめ之を一男一女と限定するは甚だ窮窟千萬なるものならんと、偶ま一男一女たる一夫婦にして生兒あるとを得ざると爲す乎、是れ其の夫婦

の不幸たるに相違なし、然れども人は自から招きたる不幸を自から忍ばざるべからざるの義務ありとす、今若し其の不幸を來す所の罪が適然一夫一婦の上に在るとなれば一夫一婦も亦或は恐むべきに庶幾からん、一夫一婦は實に其罪たるに非ざるなり、其罪に非ざるものに負はしむるに其罪を以てし、因つて其の不幸を醫するが爲めにして一婦數婦を許さんと欲す、是れ實に其人をして恣睢を極めしめんと擬するものなり、一夫一婦は天理なり、人倫なり、其の天理と人倫とを犧牲と爲さしめ以て其人の不幸を醫せしめんと欲す、是れ實に輕重を誤るの甚しきものなり、人は不幸を醫する爲めなれば如何なる事を爲すとも妨げあらざるものなる乎、然るときは一朝隣人の食を攘むも己れ餓死せんとするに迫りて之を醫するが爲めに致したる次第なりと事實明瞭すれば其罪を問はざるべきか、一夕他人の衣を奪ふも己れ凍斃せんとするに迫りて之を醫するが爲めに致したる譯合なりと口供甘結すれば其罰を免かるべきか、世未だ是の如き道理あるを聞かざるなり、己れ子なければとて便ち其子なきの不幸を醫するが爲めに一夫一婦の倫理を破壞し、恣に一婦數婦を行はんと欲す、是れも亦亡道の所爲なりと稱せざるべからず。

孟軻の如きは左の如く叫びたりき

不孝に三あり後なきを大なりとす

祖先を祭り、祖先を拜み、之を人間至大の道德と爲し、必々爲さゞるべからざるの責務と爲し、若し其の祖先の祀を絕つことの有らんとするを怕るゝこと一國の滅亡せんとするを怕れ、天地の傾墜し六合の否塞せんことを怕るゝが如くある者に於ては一男一女以て夫婦を成して、夫婦にして而して子なければ二妻を娶るも三妾を聘するも可なりと爲すに至らん、而して是れ迷ひなり、人は延後廣嗣すべきものなり、社會は繫命續脈すべきものなり、通じて之を論ずれば人に於て宜しく後あるべきは固より喋々するを要せざるべし、然れども偶ま一夫婦にして後なき者あればとて之を後あらしむるが爲めにして便ち天理と人倫とを犧牲にせしむる如きことは決して許すべきに非ざるなり、噫汝論者よ、汝實に智なきにあらず、只だ其の祖先敎の爲めに迷ひを汝の心に受けたるのみ、速かに趣つて汝の迷を距ることを急務とす。

或る輩は以爲らく婚姻の目的は子を設くるに在るのみ、今其の男子は已に一女を娶れり、而して子あることを得ず、則ち二妻を聘するも三妾を求むるも理に於て寸毫妨ぐる所あるべか

らずと、是れ抑も婚姻の何物たるを曉知せざるものなり、子を設くるの一事は婚姻の目的中の一たるに相違なし之を以て目的の全部なりと云ふに至りては誤れり、婚姻の大目的は生涯相扶け相保つと云ふの上に在り、子を設くるは唯た其の中の一部分に位するのみ、婚姻は一男一女たる者啻だ其の肉躰を一致せしむるのみあらず、併せて其の靈魂をまで一致せしめ、專一の愛情を以て相結び相契るものなり、論者の見何んぞ其の淺なるヿや、何んぞ其の短なるヿや、婚姻の目的已に斯の如くなりとすれば唯だ其の婦たる者に子なしと云ふを以て副妻を迎へ別妾を蓄ふ、極めて理由なきものと謂はざるべからず、豈に啻だ然りと爲すのみならんや、今其の一夫婦の間に於て子なしと云ふヿは未だ必ずしも婦躰一方のみに其罪あるものと斷定すべからざるなり、夫たる者副妻を迎へ別妾を求めて而して子ありとすれば、婦たる者二夫を購ひ三夫を雇ふ乃ち又生子を得るヿ無きにあらざるべし、生子の一事の爲めにして一夫數婦を許すべしと爲さんには、其の同目的の爲めには一婦數夫をも隨つて許さゞるべからざるに至らんとす、是れ豈に大亂と謂はざるべけんや、噫汝論者よ、汝實に事を解せざるにあらず、理未だ之を究めざればなり、誠に其心を平かにして深く自から推究するヿを急務とす。

一夫一婦の違ふべからざるヿは吾輩は曾つて別段に之を論じたるヿあり、玆には一々に繁論し曲說するヿを爲さゞるべし、唯だ其の一夫一婦主義の建白出づるに及んで世間の偶ま之れに對し異論を介みたる者を擒獲し來り之をして轅門に降伏せしめたるヿ乃ち上文の如くなるのみ。

而して中には又一夫一婦の大理に一毫抵敵せんと試むるにあらざるも、唯其の建白を爲すの上に就いて同意を表せざるもの無きにあらず、或は以爲らく今日の我國に於ては人の夫たる者にして妾を蓄へ妓を聘するが如き者こそ無きにあらざるべけれ、未だ一夫にして二妻を有するものあるを聞かざるなり、一夫にして二妻を有するは我國法律の已に禁ずる所あらん、之れに對して蓄妾を禁ぜよと云ふならば自から是れ別論に屬せん、蓄妾即はち是れ一夫數婦なりと斷定する乎是れ早計なるに非ざる歟今にして一夫一婦の建白を爲すと云ふは抑そも吾々の解せざる所ろなりと、是れ唯だ事の未だ通ぜざるものたるのみ、右の建白主唱者に在りては未だ初めより一夫一婦の建白を爲さんと叫呼したるにあらず、一夫一婦の精神に基き其主義に協合すべきやう法律を改良せられ又は制定せ

られたしとの建白を爲さんと主唱したるのみ、而して其の建白は實に其の趣意を以て之を爲したるのみ、固より今日の我國に於ては法律上に一夫數婦を公認しつゝあるにあらず、我國の人民に於ては戸籍上に一男數婦を登錄しつゝあるにあらず、是れ少しくも疑を挾まざるなり、然れども今日の法律は都べて一夫一婦の精神に基き其の主義に協合しつゝあるものなり耶否らざる耶と問はん、論者と雖も考一考せざるべからざる所ならん、今日の某れ々の法律が寧ろ一夫一婦の主義を奬勵すべきものと爲り居るや抑も一男數妻の名なくして實あるを寛恕すると其甚しきに過ぐるものにはあらざる耶否らざる耶と問はん、論者と雖も考一考せざるべからさる所ならん、乃ち一夫一婦主義の已むべからざるとを確信し、而して其主義今日の實際に於て甚だ紊亂せられたるを熟察する以上には隨つて其主義の爲めに一個の建白書を政府に捧呈し、以て其主義の法律上に實行せられんとを希望する者寧ろ當然の事と謂ざる可けんや、況んや、民法の如きは今未だ制定し編纂せられたるものゝあるにあらず、將に近日を以て之を制定し編纂せられんとするに於てをや。

或は以爲らく吾々と雖も一夫一婦主義の實際に行はるゝとを切望せざるにあらず、然れども法律の力に憑りて斯の如き事柄の實際に行はるゝを祈願する、是れ甚だ迂濶なり、是れ甚だ淺慮なり、左れば斯の如きの建白を政府に捧呈すると云ふ一段のみは吾々の好んで同意せざる所ありと、是れも亦建白者の本意に徹底せざるものと謂ふべし、建白主唱者の心に在りても何とて斯の如きの目的を只々法律の力に頼み、只々其れのみの力に假りて貫き透さんと祈願するものならんや、然れども法律にして猶ほ實に改むべきものゝある限りは則之を改め、法律にして猶ほ新に制すべきものゝある限りは新に之を制し、其の一夫一婦主義に遠かるものをは寄せて以つてこれに近づけ、其の一夫一婦主義に基かしむべきものをは進めて以てこれに率しめ、斯の如くにして少しくなりとも一夫數婦を啓誘すべき處より聊かなりともこれを防制すべき境に移し來るあらば爰に其効を奏すると強ち鮮少なるにあらざるべし、建白を政府に捧呈して法律を改正せよと希望する者寧ろ將た贊狀に屬するのみと限らんや。

論者よ今少しく咀嚼せよ。

吾輩は右の建白書出でゝより未だ多くの反對説あるとを聞かず、而して偶ま二三の異説に類するもの彼より此より視線に

登り來るに逢ふ、吾輩は是に於て乎大略に之を辨じて、併せて右の建白書實に政府の爲めに採用せらるゝ所と爲り、右の建白書に記載する所の旨趣實に我國法律の上に吸收せらるゝに至らんことを追願すると云ふ。

批評

○漣山人の「妹背貝」　不二山人

卷頭の條例は一々尊奉の上盲評を加ふべし。

われにいらぬ涙有合せ候故大切の一帳羅を涙に汚し申候。時代と場所、なるほど定めんでも味に變つた事なし、御道理至極。文脉は別にかぶれた邊も見へず、唯這漣[illegible]服々々。

讀者の句讀に於けるは盲者の筇に於けるが如し、是ほど御丁寧に御斷りなさらずとも誰をか不平を申さん。ダッシやスター其外の記號は矢張盲者の筇、シカシ筇は一本に限る、かふ澤山では丸木橋も追ふに及ばずナド、便利を考へた奴す。初もみち其外子供ばかりでも結構、評者の如き兒煩腦は鼻に否エ肩に取附かれても唯可愛さが増す計りにて候。

漣山人は小供心理學を研究せられしか、是ばかりは類と眞似なし、一流の專賣物と存ずる。妹背貝の壓卷とも云ふべきは春の卷にして水無雄と艶子のあどけなき情は絶好無類、例せば「たまさか一寸怒る事や泣く事があつてもその悔しさその悲しさは心の底から起つたものでないから氣まぐれな浮雲が通り雨ほんの刹那の間ばかりだ」とある如き極上々者なり。又「此間も家のお母さんが左樣云つてゝよ＝そんなにいつまでも氣になさると毒だッて＝」の詞千金の妙味あり。あどけなさが紙上に溢る、冷淡に讀下しても海老色の鼻緒と萌黄の綴紐が目にちら／＼する、少年國に游んだ心地。

全篇を春夏秋冬と分けたは一寸斬新らし、四季物語とでも申さふか。誰なりしか京傳時代に是と仝案に四季物語と名けし洒落本を作りしものありしが此「妹背貝」とは天淵月鼈。但し四季と區分する上は各々四季の景色――よし景色ならずも春は春らしく夏は夏らしく描かれたきに秋は秋らしくなく冬も冬らしくなきは如何。勿論百五頁に面白く寫されたが是ばかりでは……何か冬の特殊を慾には望みます。

五六頁に「其間の細徑を小荷駄馬がノッ／＼牽かれて行く」云々、春郊の景色見るが如し、敬服。其末に芝居の書割見るやふな景色トあり、さても漣山人の畫好にも困る、かゝる事は書き易く分り易く曰はゞ雛形を示すに等しき故世の凡筆家

往々使用すれども何の雜作もなく讀者をアット云はしむる能はず、前の「初もみぢ」にもヤレ油畫とか四條派とかありしがまだ書厭き給はずか又しても五月蠅哉。三十四頁にも「墨繪の觀音」とあるぞよ。

爰に一寸褒めたきは名の撰み樣である、英國の小說にもまゝ見へるが日本でも同じく惡人には惡らしき善人には善らしき道化形には笑ふべき濡事師には艶しき名を附るをもて常とす然し實際から曰へば馬鹿々々しき事にて世上を見渡すに名は決して實に伴はず、淫婦にお貞あれば御代官に五右衛門あり、水無雄の父は武官なれど治と云ひ兄は法學者なれど鯱麿と云ふ。是ぞリアルに協ふものか。

さて次にキャラクター。ヒロイン艶子は腦病を憂ふるほどの學問好、殊更活潑にしては珍らしき謹愼にて十一二の年で水無雄を慰さめ十七の年にいろ〳〵忠告する位の大事とりでありながら又親に向つて婚禮を否むほどの勇氣もありながら何事ぞ、水無雄の生死も分明ならずまだ〳〵若い身で思切つた死に樣、如何に活潑でも是ではチト活潑すぎる、前に二度と三度となく早まるなと水無雄に忠告しながら又忠告するほどの要愼家でありながら是ではあまり輕燥と思はる。

水無雄は温良和順、最も畫工にでもなりたいと希望するものに大した冒險者のなきは當然なれどいろ〳〵の畫人傳を見ても大家となるべき人の氣性は格別のものなり。此意氣地なき性質では「天晴名譽の美術家になつて」とは口先ばかり、とても〳〵、並々にすぐれた艶子の戀ふにしてはちと面白からぬやうなり。最も人情は理屈話には行かぬものなれど今少々男らしくしたきもの。

兎に角近來になき無難小說、是と指摘すべき傷少しもなし。舊硯友社連中の一方の大立物の貫目は確かに見へる、殊に趣向しある樣でない樣な斬新な邊もあつて有がたし。それを強て傷けんとするは井戸に臨んで鮭を求め大海に浮んで海老の髯を索す類か(分らぬぞ〳〵)

誰やらか漣山人の文を輕快と評せしは思切つた申分、われもさ思はぬにあらねど頗る愛すべき處多し。言文一致を主とするもの大抵は美妙齋を學ばざるはなくしかも美妙齋の最短處を摸倣して得意たるは笑ふべきの終極なるに獨り漣山人の文は同じ言文一致でも大に体を異にして非凡の文字多し。漣山人は言文一致宗の西鶴派とでも申すべきか、例へば、

「甘いは母親＝勉強した御褒美に＝ト買て呉れる西洋繪具繪

も精出してと云はぬばかり是では何方に付てよいやら猫を追ふて木天蓼を焼くやうなもの」（十九頁）

「その粋様の親の情が却て二人の身の仇となつた――それは六年後の事」（二十七頁）

「美術の價値も猫に小判――難波の堀の如來様、善光は居らぬか善光は居らぬか」（三十頁）

「柳下惠の兄に盗跖と云ふ悪黨。兄弟だから似るとは限らず張孝張禮の様なものは今時鐵の鞋ものだ」（四十九頁）

まづこんなもので何處となく西鶴時代の風が存して一種珍らしき邊がある。「初もみぢ」は通常の言文一致流義であつたが少しく進まれて大に喜ばし。

今の世獨逸の文學を奉ぜらるゝ人二あり、一は石橋忍月居士一は即ち漣山人なり。忍月居士の筆未だ獨逸文學の實相を寫したりと見受られず。願ふは漣山人、頼みますぞ。八月二十日富士山麓松林蓊葱たる處に書す。

細君良人に向ひ、あなた私しも斯く禁酒會員となりましたのですから、どうぞお酒をたく止めて下さい。良人、夫でも古今の英雄は皆な酒を飲だよ。細君、それではアナタが英雄にお成なさる迄お止なさいませ。

雜録

○花心の歎　　みどり

花あり、露の涙を浮べ、二葉の袖を霑ほして、歎くやう、妾わ幸ひにして花瓣を賜わり、多くに優りつる色香を稟けたりと云へど尚ほ安き心地せず、姫御前に插さるゝは上なき譽れなれど、之れ只だ妾わが顔ばせの少しく美しきを愛で玉ふのみ、玉樓の床に置かるゝは出世無上の極まりなれど、亦此れ妾わが姿たの稍や見るべき所あるを用ひ玉ふに過ぎず、時に蜂殿の來ますともあれど、蜜を盗まんとの外に念あるなく、又蝶君の宿らるゝは只だ暫らくの休みせんとに過ぎず。而して幾多の諸君、遂に妾わが金色の中心を顧み玉ふなし。

○日本現今の兒供　　山下石翁

兒供は長じて大人となるものにて、大人の人となりは多くは兒供の時の魂しひの儘なるものあり、左れば今日の日本の兒供は後來の日本を管領すべき日本人にてあれば、今後の日本の盛ゆべきか、衰ろふべきか、正しくあるべきか、悪しくあるべきかは、悉とく是れ今日の兒供の育て方何如んにあるべし。蓋し、既に大木となれる樹は矯めがたきが如く、最早成長したる後の人間は之を改良すると至つて難し、例せば今の

日本人の如き、浮氣、輕率、不熟信、不眞實、なる人物を矯正して、之を、直熱、熱心、着實、忍強なる所ろの剛傑たらしめんと欲せんに、今日の既に長じたる人々を左樣に爲すと極めて六つかし、凡そ氣質を一變し、品行を一變するは更たに生るゝが如し、人早や老ひぬれば何如で亦た生まるゝを得ん、長人、老人の變化しがたきは實に之が爲め也。

左れば今の子共を大切にして、之を正當に敎育するの緊要なると既でに如此し、然るに密かに世上一汎の父母及び長者が其幼童を取扱ふを見るに、彼等は兒供にウソを談してヲモチヤにし、卑陋の事を談して而白がり、之をコマヲセて弄わそび物にするが如きとあり、此を以て偶ま信切正直なる人ありて何事をか兒供に談し聞かすときと雖ども、兒供等は先づ之を疑がひ、ウソだよ、馬鹿お言ひよ、など口答へせざると至つて稀れなり、嗚呼兒供は何ほ小さき天人が耳を欹だて目を見張りて何事をか見ん聞かんと待つものゝ如し、一と度び見聞すれば直ちに信じ、亦直ちに其人を信じ、淡泊正直にして甚はだ罪なきものなるに、今の日本の兒供は即はち然らず、此れ長者、父兄、隣人等に傷められて、其天眞の美質を既に早く曲げ破りたるものと云ふべし、悲しきことにわらずや。

父母は固より其子を愛するならん、願くは能く心して其子を敎へ、之をして決してねじけしむる勿れ、而して姆の如き、隣人の如き、出入の人の如き、共に遊ぶの人の如き、惣べて此の子に密接して、談しを爲し、行なひを見する如き人物の何如なる人間なるかに深く注意し、彼の浮薄下賤にして言行の潔ぎよからざる輩らには決して近づけざるやうにすべし。

○女修身いろは歌

唱歌の學校に裨益するや一般の生徒課業に從事して勉強する際時々精神の疲勞を感ずるは勢の免れざる所なり於是唱歌を以て苦學の倦厭を避け快樂の情を起さしめ知らず識らず鬱を散し業に堪へるの身體を養成する枚擧に暇あらず故に種々の唱歌ありて學校生徒の應用に供せり余淺學無識と雖ども亦敎育の任に於て細小部分を占るを以て近頃執務の餘暇其固陋を忘れ筆を把て二三の蕪歌を綴り傚顰の嘲を顧みず之を貴社に投す貴社餘白を惜まず以て登錄するあらば幸甚

稻葉風陵書

い　今や文化の姫たちは

ろ　ろくに年端はゆかずとも

は　母となる身は知りつらん

に　女子の第一をしへをば
は　ほかにもあらず淑德と
へ　平生家事の經濟ぞ
と　とつがれ物事ひかへめに
ち　父と母とに能く事へ
り　良人へは從順に
ぬ　縫針仕事に怠らず
る　留守は一層愼めよ
を　女の貞操全ふし
わ　我儘氣儘のとなさず
か　かよわき女のとあれど
よ　世のため君のためとなら
た　唯一筋に盡すべし
れ　例を擧れは母となり
そ　育てをしゆるをさなごの
つ　つひに賢愚は母に懸る
ね　ねんごろに見へ敎訓し
な　習ふていよ〳〵熟すまで
ら　勞を厭はずをしへつゝ

む　無益と益とを差別して
う　內を治むる職分ぞ
ゐ　鄙も都もおなじ情
の　能ある鷹は爪かくす
お　思ひのまゝをいふなかれ
く　口はわざはひの門ときく
や　やさしく素直に謹みて
ま　枉げぬ心ぞ尊とけれ
け　穢さぬ操ぞ潔よし
ふ　不圖親のもと離れなば
こ　心に確と錠おろし
え　要心するに如くはなし
て　貞女烈婦の行ひは
あ　天晴けだかき振舞ぞ
さ　支ひかねなば死を決す
き　淸き操に穢れなし
ゆ　ゆめにも知らぬ惡漢に
め　目ざゝるとしなきとせず
み　操のためには昔より

し　死せし貞女は數多し
ゑ　會得しつらん姬たちよ
ひ　人のかゝみと仰がれて
も　百歲千歲の後までも
せ　世間に名をば殘さんと
す　末のすゑまで守れ操を

○人生の失意

仁田桂二郎

人生豈に得意の時のみならんや蓋し亦た失意の日あり其の得意の時に當ては風光景色に至るまで心を喜ばしむるの資にあらざるは無きも一旦志を得ざるの日には山河花月皆憂を添ゆるの媒に非るは無し春風溫和の色も失意の客に在ては寥乎さして恨めしく見へ秋霜凛冽の氣も得意の人に於ては快然として樂くぞ思はるゝ也人生得意の時には氣力も盛にして何なる困難をも顧ず何なる災禍をも恐れざれども或は疾病の爲め或は貧苦の爲め或は不遇の爲め或は生別死別の爲め精神衰微し氣力振はざるの時に於ては陽剛敢爲の氣盡く消へて陰柔恐怖の念常に長ず此時に當て毅然として撓まず屹然として屈せざるものは眞の大丈夫と謂ふべし得意の人世之を稱して大丈夫と云ふも未だ信ずべからず王侯相將、世之を呼で英雄と云ふも未だ信ずべからず博士豪商、世之を尊て俊傑と云ふも未だ信ずべからず唯だ貧苦落魄、名譽を失ひ財產を亡ひ知己朋友に生別し父母妻子に死別し事業成らず志望蹉跎とし身は病み家滅びんとして而して心を動かさゞるものに至ては古來少し是れ眞の大丈夫に非ずして何ぞや故に予クロムウエルを賞せずしてミルトンを賞しガンベツタを親まずしてユーゴを羨む若し人の品位を知らんと欲せば請ふ其の失意の時を見よ

一國の政權を握る時には其の威望盛なれども一朝青雲より俗界に陥ち來れば其の品位常人と異ならさるものあり老中奉行として時めきたる人も今日に至れば是れ亦た常人と異なるなきのみならずして失意の餘、憫むべきものあらん同じ人なれども前には智にして後には愚となる是れ得意と失意とに因るなり失意の時謹むべきなり

○人生行路難

同人

人生行路難し誰か安逸を欲せざらん之を得ざるのみ夏日巍々たる高樓の上に坐して淸風に浴する人は安逸なるが其の人が此の地位に達するには幾何の艱難を經過せしぞ今日此の地位に在るも豈に憂苦なからんや其の肉躰こそ安樂なれども其の精神は一日も憂苦無きことは有らじ

學者政治家が名譽を逞ふし高貴を極むるは實に羨むべきが如くなれども細に其の心情を尋ねば其の人が此の地位に達せしは艱難辛苦と勉强忍耐とに因らざるは無し既に此の地位に達するも其の艱難辛苦は依然として變らざるなり昔しは敝衣惡食したるものが今は飽食暖衣すれども其の心には何如して書を著さんか何如せば我が名譽を維持せんか政治の方針を何如せん此の地位を固する爲めに何如すべき抔千々に心を碎くべし油斷せば忽ち其の富貴名譽を失ふべし富貴の人豈に安逸ならんや

苟も世路を行くの人誰か其の難きを知らざらん官員には免黜の憂あり長官の門に伺候し同僚の交を圓滑にするも亦た容易き事に非ず商人には損失の憂あり時機に投じ掛引を巧にし信用を博し客意を迎ふるも亦た難しと謂ふべし學者が書を著するは其の主意の新奇と其の結構の巧妙と文辭の流麗とを兼ねざるべからず且つ時好に應ずるや否やをも考へざるべからず批評家への交際時樣社會との聯絡も忽せにすべからず是れ亦た難し其他何人と雖も行路の難を感ぜぬものはあらじ

行路の難は足柄山よりも嶮しく富士川よりも危し足柄山には鐵道布けて恰も平地を行くが如し富士川に鐵橋を架してより大雨にも舟を流すの憂なし獨り世路の艱難に至ては文明も理學も之を除くの方便を敎へざるなり世の文明進むに隨ひ世路の艱難は增すとも減ずることなけん人口は增殖し社會は繁雜となるが故に生活の競爭益す劇烈となるべし生活の競爭益す劇烈なれば世路の艱難知るべきなり

獨り生活競爭の劇烈なるのみならずして父子兄弟も深く賴むには足らず况や其の他の親族おや朋友は裏切せんとし師弟も欺詐せんとす我に甘言を食はすものは奇貨とせんが爲なり我を稱揚するものは自ら爲めにする所あればなり誰か賴むべきものぞ誰か親むべきものぞ誰か信ずべきものぞ夫れ單身孤立世路を行くは恰も扁舟の蒼溟に棹すが如し若し磁石の方針を指示するに非ずんば焉ぞ迷津に入らざらん若し指南車あるに非ずんば焉ぞ五里霧中に謬らざらん蓋し世路の險を冒して

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

屈せず世路の迷津に臨で迷はざらんと欲せば唯だ宜く一定の主義を懐抱し槃錯にも之を變ぜず死生にも之を易へざるべきのみ
此の主義は何なるものか是れ正道なり是れ正路なり人、一度正道正路を取り之を歩まば其の平坦なること銀坐の街道の如きを覺ゆるならん是れ人生の大道なり若し大道を踏み正路を行かば縱ひ何なる障礙あるも曲彼れに在れば恐るゝに足らず我は以て我が道を行くべきのみ若し夫れ事業成らずして失敗するも又以て俯仰低徊して恥る所なかるべし嗚呼人此の大道を行くにあらずんば焉ぞ能く安心立命の地を得んや狹斜徑路は予が取らざる所なり
此の大道を教ゆるものは倫理學と宗教なり、されども倫理學は未だ完全せず且つ倫理學は專ら理性に訴ふるが故に其の効能甚だ少し獨り宗教は感情と意志とに訴ふるが故に其の結果甚だ多し抑も信仰なるものは意志の働にして已に斷行の意味を含むなりベイン氏心理書も信仰を然か解釋せり此の信仰を博すべきものは宗教なり宗教豈に忽せにすべけんや宗教にも千種萬類あれども上下二千年東西六千里の經歷を見れば溺志弱行を改めて剛毅果敢と成し自信力行、世路の險を行して平地の如く進ましむるものは夫れ唯たキリストの教か

○名著作年齡

去月の「米國公論」に古今の名家が名著作を爲したる年齡を表示せり、之に出りて見ても、當今發出しの日本文章家が傑作を出すには、尙ほ隨分の年月あるべき筈なり

Byron	began "Child Harold."	20.
Le Sage	"Gil Blas."	50.
Wordsworth	"The Excursion."	44.
Goethe	"Sorrows of Werther."	23.
Addison	Commenced "Spectator."	39.
Carlyle	"Sartor Resartus."	37.
"	"French Revolution."	42.
Swift	"Gulliver's Travells."	59.
Macauley	History of England."	48.
De Quincey	"The Confession of an Opium Eater."	35.
Milton	"L' Allegro."	25.
"	"Paradise Lost."	57.
Gray	"Elegy in a Country Churchyard."	43.
Schiller	"The Robbers."	19.
"	"Don Carlos."	27.
Bacon	finished "Novum Organum."	60.

○木から落た猫

さる旦那殿猿にそのまゝなれば家內猿といふ事を遠慮しけり或る初春に到り元日早朝に別家の伴頭年始に來り旦那殿の前へ出でまづ未の年も首尾よく御越遊ばされ申の元日と云ふやいなや旦那目をむき出しおれが前でさると申すは慮外千萬向後出入無用と叱り給へば伴頭手に汗をにぎり左樣仰せられましては私木から落ました卜云さして旦那の顏をながめ木から落ました猫で御座ります。

○さりとは吝い高が四文

腰元旦那に灸をすへしにたび〳〵落す故旦那に叱られ次の間へ來りコレおせんどのわたしが代りに行てくんなせへと云へはきゝなさへしわい旦那じやアねへか度々落すからすへるなとよ、一大器落して高が四文だ。

○首は看板

本所割下水の邊を首賣ふ〳〵とせつて步行けば或る殿樣其の

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

節御調べ成されし政宗の刀御ためしなされたき旨早々彼の首賣を呼込み首はいかほどで賣るぞと役人問へばハイ一兩で差上げませふと云ふそれは下直なりとて首賣を土壇にすへ政宗の刀を抜て討かけ給へば首賣身をひねりたもとより張子の首をなげ出せば殿樣御立腹にておのれが首は貰つたぞと又も刀を振上げ給へばハイ私が首は看板でござります。

○婚禮の席から欠落

仕事師婚禮振舞に招かれ支度をして出掛る處へ友達來りおのしや歸る時の言葉を知つて居るか。イヤ知らねへおせへてくりやれ。かならずあお暇申すの歸りませうのと云ふ事は禁物だ。そして何といふべイ。ひらきませうといゝやれ。オヽのみ込むだとかの座敷へ行き鱠のけんのくねんほうまでしてやり膳がひけるやいなやしびれをきらし御亭主さん私しや欠落いたしやす。

○まづ首は助かつた

臆病なる盜賊ちとかせいで來やうと思裝束にて出掛ける表店をうかゞへば夫婦の口舌こいつわいつ寐るか知れねへと其隣を窺へば物しづか故段々戶をこぢはなして這入て見れば明店盜賊ためいきをついてまづ首の氣遣はなし。

兒籃

○駱駝乘アリーの話し(つゞき)　みち子

吹き來る風は沙漠の小砂利を卷きあげます一間先も見え分くるとが出來ません、商隊は悉く地の上にふしまろびふたゝび起もあがりません喉がかわくとよう／＼に立あがり駱駝の背にある水壺より水を飲で其渇きをとめてまたうちふしては風の止むのを待つて居りますかくする事が大抵三日ほどになりました風は前よりは餘ほど靜まりましたが困つた事には水壺の水があくなつてしまいました、アリーも水壺の水を悉く飲み盡し明日は如何になるかと云ふ考へに眠りに付ても思ふようにはねむられませんしかしミーキアイはよくねむつて居ります自分も終日のつかれに居ねむり計りして居ると曉近くなるころグト／＼と話し聲が聞こえますアリーは何の氣なしに耳をたてゝ聞きゝますと一人の駱駝乘の頭が傍らの商人に話しをして居るのデス、

明日になつて水が見付らぬ時は仕方がない駱駝を殺さずばなりますまい駱駝の胃のうちには水があればその水なりと取らずば私共の命がありませんしかし別に不用の駱駝と云ふものもありますまいからいろ／＼と考ましたがあのアリ

ーと云ふ小供の駱駝がよいかと思ひます　商人は之を聞てさよう〳〵私共のはなか〳〵價がある駱駝故殺されては大變ダス子供が一匹の駱駝をもつて居るのは幸ひイヨ〳〵水が見付からずは早速殺して貰ひ度ひものダ。

この話しを聞て居たアリーの驚きは如何デショー、心のうちには悲しさが一ぱいになりましたしかしそのうちにまた決心と勇氣が出て一刻も猶豫する所ではない愛するミーキアイが殺されなば父にも母にも申譯がない何にしろ出來る丈は逃れて見んとミーキアイを起し四方の樣子をうかゞへばヒッソリとして音もなし軈て仕度を調へてあてどもなく出掛ました、沙の上をばミーキアイは幼きアリーを輔けつゝ進み行くに夜風いとすゞしくひるの苦しみはありません。

小說

○冷熱記　北邱僊士錄

第四章　夜の露

右引續き可相揭の處ろ眞才子一篇相殘り數號延引致し候に付之を本號にて揭了し次號より間斷なく載せ可申候。

○眞才子　麻溪居士

下卷　實に戀は浮世を渡る辛酸を人間が知り初める初歩です（完）

第一の城壁早くも破碎せられて、今は第二の頭を築く暇ありません。涙は時々顏に流れて來ます、心の內には妙な家へ行けば、もう是迄の樣にして居譯にも行かず他人の機嫌を取なければならず、親くして居た人にも、疎縁にならなければならぬが、第一母親の言葉に後れない根據に成て居るのです、此時母親は少し心付た樣です、心付て見れば、さすがに強くも言れませんから。先方の心を誘導して其根據を見出そうと考た樣です

「コレお花……、よくおきゝ……、此話を先方からして來た時に、お父さんはお前には別に所存もあるまいから、直に返事をしやうとおつしやつたのを、私がお止申して、一應お前に聞た上でと延して置たのだから、若し外にお前の思てる事があれば、私迄よく話してもらはなければならない、私の方からお父さんにはまたいゝ樣に申上るからネ：：だから外に相應な者でもあつて……、お前が緣組したいと思つてるなら私にお言ひ、お前の好た人ならそれがお父さんも相應だと思召す位なら、私は先方の者がどんなに言

てもお前に縁談させるからよ　お花、　お前はまあどう言ふつもりなんだェ、サアお目出度話に泣く者があるものかチ、お前の思てる事を言ておしまい

談しの內にも隣室で變な咳拂をするのは私です

「サア早く…サア

香にいざなわれる蝶――實に心元ない蝶――、ろの飛で居る中に、これから羽をやすめやうと云ふ花を見付て、其花を切て蝶の心を迷せ樣とは――、さてもむごい仕方です、ですが此方もうかと其花を言ません、其の香のある枝を見せません、わざと外の枝のまわりに飛で居ます

娘「私はお金持で大きなお活計をなさる方より、文學士なんて立派な位を持てる御方より……心を知り合つた人に……、貧しくつても……世の中の事を正當に處理する（蝶芳さんのやうな）……、お母さんどうぞ……、此縁談はお斷りなすつて……下さい

母親の目は……キット娘を見詰ました、さては香のある處――意の注ぐ處――羽をやすめる處――夢を結ぶ處は――廣園富家の花にはなくて却て我家の庭に生茂りし草にありしか、さては……此時聞て居た私の心の裡の悅しさは。――實に此時初めて花子を戀ひ初めました。今までは唯幼少なじみばかりで親しいのですが、今度ころ性質が變て一種の感情から、眞に可愛らしく思ひ初めました、今迄は私もなじみ過て花子に强ひ荒ひ言葉を用ひましたが、此時からは妙に自分ながら愛情から溢れた優しい言葉ばかりです。實に「戀」は浮世を渡る辛酸を人間が知り初める初步です、此初步を學ばない者はまづ無形の學問のない、人です、花あつて香のないものです。月で光がないのです、ですが（嗚呼）また靑年の心には餘り六ケ敷い初步です。人間の一生を經緯する基礎を、吾人靑年に習はせるのは餘り苛酷な事です

此時から私の繪師は非常に私の擧動に注目し初めました、私も一の大望が胸に浮んでは一層の注目を加へて、萬事失策のない樣に働きました。實に「愛」は目に見えぬものですが……その力の大きな事……是を思へば人間は戀の奴です。記憶せよ讀者諸君――神聖にして絕美なる愛を……

◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦◦

時は三月の末です私は共進會の繪を仕上て居りますと、私の師はやつて來ました――此時の一事で私の運命が定まりました。其事は……それが上卷に詳しくあります（大團圓）。

史傳

○チヤアレス、ヂツケンス傳　（其四）　ふ、ち、

次に著はせしは「マーチン、チヤツズルウヰツト」にして大西洋外の事情を描きし所多し。開明社會の毒菌讒謗詐僞會社ポーエナイフの亂暴等悉く米國社會の實相を描寫して篇を埋めたり。此篇は我慾を最も甚だしき不德とし主人公マーチンが我慾私利に赴き自ら困難する樣を巧に寫せしなり。

其後氏は家族を連れてゼノアに赴き二年間其處に滯留して伊太利圖繪（Pictures from Italy）を著はしたり頗る快活又深切にして氏の用意は世の案内書めきたるを避けしにあり。出立の前氏の才筆を借ひて其旅費を助けしは高名ある「クリスマス、カロル」にして其奇想殆んど天外より下るの感あれは大に世間の喝采を博したり。伊國に滯留中再び「カイム」を名附くるクリスマスの書を著はし是も又喝采を博せり。

其時氏は「カイム」の原稿を詞友の間に讀まん事を樂しみて倫敦に歸り數日間滯在せり。

千八百四十四年十二月二日リンコルンス、イン、フィールヅに住居せるフオースター氏の家に有名なる會合ありたり。チツケンス氏が自ら「カイム」を讀むを聞かんとて集りしもの其傳紀者（フオースター）氏の外ジヤーロルド、ブランカード、カーライル、フオックス、ダイス、ハーチス、マクライス、スタンフイールド及び著者の兄弟フレデリックの諸氏何れも文學或は美術を以て名を當世に知られし人々にて千八百七十一年フオースター氏のヂツケンスの傳紀を書きし時同じ堂に集まつて今現存するもの唯カーライルと氏のみなりと曰へり。

其折流說あり、此大小說家も殆んど腦力を盡して最早作る事能はざるなりト。「殆んど書き盡した」と互に傳稱して喧すかりしのみか甚しきに至つてはある新聞紙などは氏の演伎の才あるは著名の事實なるを以て此上の手段は俳優となつて場に上るべしと氏に勸告したり。かく評判高かりし中に氏が「ドンベイ、エンド、サン」は忽然顯はれて大に雷同の浮評家を驚かしたり。「ドンベイ、エンド、サン」のキヤラクターは凡て前と異なりて更に讀者の喝采を博したり。キヤプテン、カトル、ブンスビー、ピプキン、ツードルス、ニッパー、ブリンバー等何れも讀者の心に新らしく、或は淡泊水の如く或は奇警深奧の觀察を爲し或は奇怪不思議の運動をなし或は惡齒黃肌の瘦婦或は古語を讀ず女學士等一ッとして珍らかならざるはなく又

其肺腑に立入らざるなし。前の「マーチン、チヤッズルウ井ット」は我慾を寫せしものなるが此「ドンベイ、エンド、サン」には俗傲を描きたり。

其後數年間氏が引續きて著はせしはクリスマスの書にして中にも「クリッケット、オン、ゼ、ハース」は最も成効して賣高は殆んど名譽の「カロル」に二倍せりと云ふ。其他「ゼ、バトル、オブ、ライフ」及び「ゼ、ハウンテッド、マン」の二書あれども他の如く大に世に知られざりしなり。

氏は伊太利及瑞西に住み大に思想を養ふの後倫敦に歸り非常の苦心を以て著はせしは即ち氏が一代の傑作とも云ふべき「ゼ、ヒストリー、オブ、ダビッド、カッパーフ井ールド」なり。主人公ダビッド、カッパーフ井ールドは即ち氏が反影にして氏が種々辛酸を試めし經歷を叙せしものなり。ある人の說に依れば氏の姓名の頭字C.D.を轉倒してD.C.となし是を頭字としてダビッド、カッパーフ井ールドの名を作りしなりといふ。かの幼少にして其賤が家より汚穢の職工場に道路を辿りしは氏が靴墨屋に雇はれし日に起りし實歷と感情を寫せしものにして終に意を決して探訪者となり文學に盡力し且成効せしダビッドの始末は恰も氏が照影なり。殆に豪雄にして淡泊なる老人ペゴッチー、諂諛上手にして僞の謙遜を飾り人に阿り人を妬むの賤情に富みたるヒープ、强情傲慢にして極めて陰險なる性質はよく何人をも厭制すべしと信じたるマードストーンス、機才敏捷にして誘引的なれども心裏奸惡にして我慾を事とするスチーアフオース、粗野鄙俗にして其職掌を盡すに堪ざるも晩年府尹に轉じ罪人を愛したる學校長クリークル、可笑しき衣服を着け評判の長靴を穿てども猶紳士たるメル、善良なれども頗る氣短にして馬飼と間斷なく爭ふベットセイ孃、馬鹿律義なるトラッドル、眞似の出來ぬミカウバー、愍然なマーサ、高慢なスチーヤフオース夫人等一卷の中に範められたる人物の多くして各々異なりたる性質を集めたるは古今其比を見ざるなり。脚色も前の諸作より頗る進步して立案始終貫徹せり、殊に道德より曰へばヂッケンスの諸作中——ヂッケンスのみならず凡そ小說中此に上越すものあらず、才能ある奸物が次第々々に傾むき終には家破るゝに到り不運なる子供が是を救ふの人もなく特別の才能もなく又た幸運の囘り來るにもあらずして唯忍耐と正直と信義をもて終に名譽をも幸福をも得るに到るは讀者をして快哉と曰はしむるに足る「ダビッド、カッパーフ井ールド」の如く能く勇氣自信正

義の課を教ふるもの前後無比といふべし。

ヂッケンスの諸作――取わけ此「ダビッド、カッパーフヰールド」を讀むもの氏が全力を盡せし事を等閑に讀去るべからず、各人各物一として氏が腦力を費さゞるはなく深く考へ細かに觀察して後筆を下し、惡人を作る時は其心を兇惡にして善人を設くる時は又其心を純潔にし、自ら假作の境遇に身を置き造次顛沛にも思慮を廢せざれば凡そ氏の作る處の人物一として極質ならざるはなく性情を描寫するに悉く皮肉の間に立入りて極微の極微まで殘す處少しもなきは誰として氏に及ばん。害惡不正過誤の氏の觀察に遇ふ時はまづ「如何にして來りしか」と考へ次に「如何にして移すべきか」と考ふるを常とす。第一の應問を盡して第二に及ぶ、是れ氏が著作についての考案と全じきなり。

氏は其後「ブリーク、ハウス」を著はしたり、然れども前の「ダビッド、カッパーフヰールド」の聲譽に作ふ事を得ざりき。

其後氏は「ライソー」、「ニユース」の記者となりしが事わつて止め、引續きて自ら氏の著書出版書肆と計りHousehold Words及びAll the year Roundと名くる毎週雜誌を發刊しいづれも喝采を得たり（百七十五號の傳記中に氏が幼時にOur Schoolの一篇をHousehold Wordsに載せたりとあるは後年の誤謬あり）。彼の是等の雜誌に載錄せし中には大いに見るべきものあり。「エ、テール、オブ、ツー、シチース」の如き是れあり、英佛兩都に起りし佛蘭西革命前後を細寫せしものなるがバスチル陷落を描きし手際はカーライルも又一歩を讓るべし、篇中兩敵に於けるダーチイの裁判は氏の傑作の一なり。

寄書

○婚姻の性質及其目的

秋洲健次郎

婚姻は一男一女の結合のみ然れ共此婚姻こそ實に宗族の始にて宗族は社會を成すの原子なり夫れ然り其事は一男一女の結合に過ぎずとするも顧みて社會を成す原子たるを思ひ又吾人が幸福の泉源たるを覺らば决して輕忽に腿過すべきにあらず夫婦の關係も親子の關係も兄弟姊妹の關係も皆此婚姻より生出し來るされば古來各國の法典にも之を規定し有名なる數多博士も既に議論を煩はしたる所以なれ而して吾人の筆を採りて此文を綴るも亦婚姻は吾人社會に生存するものゝ宜しく講究すべき問題たるを信すれば也

然と雖之を評論するに於ては一言一句の能くし得る所に非ず紙を容むも勢ひ數章數項の文を綴らざる可らず故に予は玆に婚姻の中に就て其性質及目的にのみ筆を運び其他婚姻の歴史條件及其効果の如きは之を他日に讓て今茲には述ざるべし

婚姻とは如何なるものなりや之に答ふる事頗る難しされば羅馬に獨に佛に英に博士學者の之が定義を下せるもの枚擧に遑なきにも拘はらず今以て確乎不拔の定義を得るに苦むなり或は宗教法より之が義を下して神意に叶ふたる男女の結合と云ひ或は財産を獲得する爲の組合と云ふものあり予數多學者の說を見て其孰れか眞理なるやを判別するに苦むと雖も予の最信する所を取て之が定義を下すときは略に左の如く云ふに於て躊躇する所無し

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

曰く婚姻とは法律により生涯を明し愛情を以て合したる一男一女兩性の身分關係也矣予は既に定義を與へり予は今此定義に據て婚姻の性質を論すべし

凡男女は同棲相親の天性を具有す換言すれは男女同棲は天賦固有の性能なり然れ共此天性は獨り人生の專有にあらず實空を飛翔する禽も山野に奔走する獸も尙此性を有す此性は決して萬物の靈たる証とはならす唯人生には婚姻なるものありて肉躰と神魂とを合せしむ之れ實に禽獸に誇るべき點なりとす若し夫れ單に肉躰の快樂を取るのみならしめば禽獸の慾と擇ぶ所なけん朝作暮散は禽獸の性にして彼の太古の共同配偶の如きは此境界を脫せざりし也一夫數婦數夫一婦亦未だ進化の道行中に在るものにして眞の婚姻と云ふべきものにあらず一夫一婦は天理也人の人たる所以唯此に在て存す

抑も婚姻は愛戀を以て成る愛戀は婚姻の精神なり既に愛戀は婚姻の本質たるを知らは自ら一夫一婦の天理なるを覺らん然れ共予の意を誤る勿れ愛戀は愛戀にして慈惠にはあらず故に夫は妻に妻は夫に互に信實なる均一なる平等なる神聖なる愛戀を運ばざる可らず誤解して夫慈惠を加ふるの謂なりとせば彼の男子の意中恩惠を與ふるを記し賤蔑を加ふるを免れず是豈に婚姻の本義ならんや予の所謂愛戀に非る也男依女從は予の嫌惡する所（女從男從は勿論なり）其女を器械視するは眞愛の本色正當の婚姻にあらず故に正當の婚姻は神聖の愛戀を運ばざる　からず爰に愛戀を以て合したる婚姻あらんか此婚姻より受くる所の幸福は眞正の幸福にして其快樂は又神聖の快樂也試に之を他の目的を有するものに比せば直に其孰れか眞正々當なる婚姻なるかを知らん夫の婚姻を以て其目的子孫附殖のみにありさするもの、東洋國の如く妻を視るに奴隷を以てするもの、希臘の如く美術視するもの、羅馬の如く人種保衛者とするもの、中世紀の如く財產獲得の爲に要するものさ比して孰れか正當なるべきやは之が斷定を讀者に任す予は判斷を奏するに及び一の注意すべきことあり讀に必らず之が判斷法なり凡る婚姻の貴き所以を知らんと欲せは之を少壯血氣の當時に見んより寧ろ頭髮霜と化し去り額に波を生したる老後に見よ此時に及んで尙婚姻の資を保維するものは獨り愛戀婚姻のみには非るか利欲に因し虛飾に因し情慾に因する婚姻の如きは能く婚姻の神聖貴重を維持し得べきか之に着目し來れは其孰れか眞正の婚姻なるやを判斷するに於て多く躊躇を要せざるべきを知る

此正當なる婚姻即ち一夫一婦の婚姻愛戀を以て合したる婚姻は又目的を有す然れ共此目的を遂せんか爲に合するに愛戀を以てするにはあらず却て愛戀を以て結托したるか故に自然に生し來るの結果に外ならず他にあらず子孫附殖と相互扶持の二事是なり子孫附殖は婚姻の主たる目的なり然れ共婚姻の目的は子孫繁殖にありと云ふ可からす唯主たる目的たるに過ぎざるを以て子女無きが故に婚姻にあらずと云ふを得ず又婚姻は獨り快樂を取るのみにあらずして苦樂休戚を同ふせざる可からず是れ扶持する所以にして愛戀を以て成りたる婚姻には離るべからざる結果なりとす愛戀を以て合したるものにして誰か扶持せざるものあらんや扶持せざるは愛戀を以て合したるに非る也愛戀吾人は婚姻を論するに當り吾人の眼中只愛戀の存するを知る味合、親睦、快樂、幸福等皆も一家の精髓を言顯はすの文字は皆此愛戀の文字に出づ其愛戀が本文の眼目にして之を外にして又婚姻無し瞬時も離れざるものは婚姻と愛戀となり之れ實に正當の婚姻にして世間の婚姻皆此の如くんば吾人何を望んで婚姻の論を綴らん

◯林中靜流　　無有生

僕廢然たる斗室の裏に跼蹐し鬱々として三伏の炎熱に呻唸す足漫に戸を出てす眼を射辨に觸はさんとするものから氣息喘々として汗滯くるが如く玉汗淡々さして雨に似たり斯くては詩興も其甲斐なかるべし不如先生の勸むるに委し一飛揚路州山明水の間に浩然の氣を養はんには即ち母輿に侍して伊香保に遊ぶ雲の湧勃たるも雨の霏霏たるも既に自ら味ひあり況んや暾晰將嶺に閃くの朝た霞を破つて綠林を彷徨するの時暮靄蒼翠を鎖するの夕べ潤瀬月影を碎くの潺朗々さして母子共に高吟するに於てや頓に名聞利鎖の軛を離れ羽化して登瀛するの想ひあり惟へらく是先生の賜なり深くは謝する所あらんと

流石に日中は祝融の火車を懼れて門を出づるを願はず陶窗の下竹榻に倚て午睡を貪るをのみ常とせしが後には是にすら倦果て消光の法なきに苦しみたり曾て聞く碩學スペンサー Our secret in education is to know how wisely to lose time. と云へる事あるを之を想起し意を勵まして書店に赴き彼此點撿の後宮川舍漫筆と云へる本を借り來り之を繙くに面白き節解からず漸く消夏の法を得たり其中尤も面白く讀せし蜀山人壁書を抄寫して之を先生の机下に捧げ聊か恩を報ずるを竊ふのみ

蜀山人壁書

年頃吾が書を請ふもの多し扇子團扇額屏風服紗唐紙和唐紙イヤナ羽織の胴裏に

至る迄現ャさしして果しなけれは吾其講ふものゝうるさきによりて上中下の品を定む上は速かに書くべし中は預り置きて書くべし下に至りては書べからすもし倒かすしてあづけ置くものあれば扇は鼠の喰むに委せ紙は反古堆中に洗めて永却浮ぶ瀬なかるべし

上の部

一詩歌の心をも辨へたる人
一詩歌の心はしらねども甚だ之を信じて貯へ置く人
一名人の請謁
一表裝迄つて美にして掛ものさする人
一至つて美人の直頼み中位にては不承知なり又傾にては受取らず

中の部

一詩歌の好みなく何にてもよろしきと云ふ人
一人にやるにてもなく自ら納めなくさ云ふ人
一扇一二本短冊二三枚唐紙一二枚好む人

下之部

一惡謡悪紙和唐紙を辨へざる人
一遠國へ近々旅立人に贈るさ云ふ人
一小者の僧高ければ扇にかゝせてやるが徳用と云ふ人
一何か一向わからねども書せて置が得と心得へてむせうに書せる人

此類婦人に多し

一筋違御門外を古道具屋山下あたりへ賣る人

此外いやな事だらけにして見る目もうるさき事多しあたら光陰を費して慾深き者の目を悦ばしむるにしのびず仍呼書如件

○わが友今泉ゆい子の永眠をはかなみて

せ つ を

蓮葉におく白露のはかなしやさうふ風にたゆる玉の緒
かねてより露とはきけど女郎花盛りをまたでなさか散るらん

新報

○啞然たるもの三

江戸開市三百年祭烟火あり競馬あり楷子乘あり奏樂あり盛大なる御催し吾人只啞然たるのみ、而して最も吾人をして啞然たらしめしものは藝妓連の手古舞及び水泳女にぞある數萬の群集中に男裝を粉し股掛に兩肌脫の醜躰を爲し恬として恥ぢず彼れ却て得色あり、粉黛汗の爲めに汚され痴人指し嗤ふを彼れ却て色ある を誇るものゝ如し而して吾人をして最も强くかつ切に啞然たらしめしものは稗血會員が是等の婦女子をして場中を周旋せしめ委員諸君が其入場を許し來會せし紳士淑女これを視る喜色あるの一事なり。

○印刷局王子工場患者統計

官報八月十七、九二十の三日に掲載せられたる右統計の報告を見るに、男女の患者及死者比較大畧左の如し

一、男女患者前年對比增減表

病類 年別		患者數 廿年	患者數 廿一年	比較 增	比較 減	平均人員ニ對スル比例 二十年	平均人員ニ對スル比例 二十一年	比較 增	比較 減
神經系病	男	五六	一一二	五六	—	一三〇・六八	二四〇・四五	一〇九・七七	—
	女	八一	一二三	四二	—	一四〇・八六	二四八・四六	一〇三・六〇	—
呼吸器病	男	一三七	一三二	—	五	三一九・七一	二八三・三八	—	三六・三三
	女	七四	一〇八	三四	—	一二八・六八	二一四・六四	八五・九六	—
血行器病	男	五	—	—	五	一一・六七	—	—	一一・六七
	女	三	二	—	一	五・二二	三・九七	—	一・二五
消化器病	男	三七八	四四八	七〇	—	八八二・一一	九六一・七九	七九・六八	—
	女	二七六	三〇七	三一	—	四七九・九六	六一〇・一四	一三〇・一八	—
泌尿器病	男	—	三	三	—	—	六・四四	六・四四	—
	女	四	四	—	—	六・九六	七・九五	〇・九九	—
生殖器病	男	—	七	七	—	—	一五・〇三	一五・〇三	—
	女	一九	一五	—	四	三三・〇四	二九・八一	—	三・二三
運動器病	男	四九	七〇	二一	—	一一四・三五	一五〇・二八	三五・九三	—
	女	六一	八三	二二	—	一〇六・〇八	一一四・九六	五八・八八	—
全身營養失常	男	一	—	—	一	二・三三	—	—	二・三三
	女	三	一	—	二	五・二二	一・九九	—	三・二三
傳染病	男	八七	七九	—	八	二〇三・〇二	一六九・六〇	—	三三・四二
	女	八五	三九	—	四六	一四七・八一	七七・五一	—	七〇・三〇
體内寄生動物	男	—	一	一	—	—	二・一五	二・一五	—
	女	二	一	—	一	三・四八	一・九九	—	一・四九
中毒病	男	—	一	一	—	—	二・一五	二・一五	—
	女	一	—	—	一	一・七四	—	—	一・七四

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

皮膚病 男	一八	二三	—	五	六五・三四	四九・三八	—	一五・九六
皮膚病 女	二八	二五	—	三	四八・六九	四九・六九	一・〇〇	—
黴毒病 男	一三	九	六	—	三〇・三四	四〇・七九	一〇・四五	—
黴毒病 女	九	五	—	四	一五・六五	九・九四	—	五・七一
外傷 男	一一三	一〇〇	—	一三	二六三・七〇	二一四・六八	—	四九・〇二
外傷 女	四一	二六	—	二	七一・三〇	七七・五一	六・二一	—
炎症及其續發病 男	一〇五	八四	—	二一	二四五・〇三	一八〇・三三	—	六四・八〇
炎症及其續發病 女	一〇二	七四	—	二八	一七七・三八	一四七・〇七	—	三〇・三一
異物發生病 男	一	—	—	一	二・三三	—	—	二・三三
異物發生病 女	四	—	—	四	六・九六	—	—	六・九六
耳病 男	一二	八	—	四	二八・〇〇	一七・一七	—	一〇・八三
耳病 女	八	三	—	五	一三・九一	五・九六	—	七・九五
眼病 男	四七	五四	七	—	一〇九・六八	一一五・九三	六・二五	—
眼病 女	六〇	六五	五	—	一〇四・三四	一二九・一三	二四・八四	—
總計 男	一、〇三二	一、二四一	一〇九	—	二、四〇八・二九	二、四四九・五五	四一・二六	—
總計 女	八六一	八九四	三三	—	一、四九七・二六	一、七七六・七七	二七九・五一	—

之に因りて見れば、患者の前年より增加したるとは、女性質に男性に勝る如なれども、其患者ある割合に至りては男性の方はるかに多く殆んど七八分增に至れり。又病氣の中ち尤多き症は呼吸器病(肺病の類)消化器病(胃病の類)なるが此二症に付ても男つねに女よりも多く、其多き割合は殆んど倍に至りたるを見るなり。

二、男女死亡者前年對比增減表

此表によりて見れば、兩年ともに男二人、女三人にて女の方多し、特に職工の數に於て女の方少なきとゆへ、死者の割合は女の方三と二の關係よりも更に多し、而して其死症は大氐肺患にて、男の方にては傳染病神經病などを多しとす。要するに女子職工の衛生は左程に心配すべきものにてなく、寧ろ男女同樣に仕事するも衛生上に於ては掛念なきが如し。

○婦人矯風雜誌の新編者

婦人矯風雜誌第十七號に云く、

之を聞く往昔武田信玄の臣に岩間大藏なる者あり性怯懦にして死を畏るゝと殊に甚はだし信玄之を戰陣に試むるに七進七退す信玄曰く尋常法を以て叙す可らずと一日戰に臨俄かに大藏を捕へて之を竹牌の外に縛し敵に向つて坐し寸歩も動くを能わざらしむ則はち矢丸雨下殿鐵雹の如し大藏膽落ち神死し復た人色無し幸わひにして中らず戰を了るまで惴々たるも以て恙なきを得たり大藏是に於て翻然として改悟し此より戰ふ毎に勇を鼓して先登し遂に以て勇名を成すと、

乃ち妹も亦た大藏と完然同一の境遇に陥いらんのみ

吾人今日すでに鋭女史の尙大議にあらざるを知る、思ふに異日新大藏の尤も大なるものを得べし、依りて該份の爲に祝す。

○東京開市三百年

漠々渺々たりける武藏野の原は、今日の主府東京市にてあるなり、われ三百年祭に於て今昔の感胸頭に溢る、誰か謂ふ幕府に於て必らずしも勤王の心得無かりし、賄賂不正の政事請はだしかりしと、嗚呼英雄すでに無し、淺人起らず。

○蛙、雀、地震、山林

清國の文章に奇論多し、昔には吾が熊本大震に付きて地震國と憲法國との兩立すまじきとを論じたり、然るに此頃亦た寧波なる官衙に於ては、蛙及び雀に關する法令を發し、

蛙は水田に住み形ち少なれども尙ほ一己の人間なり夜は美妙の聲を放ちて歌ひ蛙を食つて穀物の害を除く云々、雀は其時を得て樹上に囀へづる生長するに及んでも虎狼の如く人を害するものなし然るに之を捉らへて小山及び樹上に住ふものと自山を剝ぐ濫し剪を殺して其肉を食わんとするもの也云々。

固より奇論なり、然れども皆な隠れ巧妙の眞理を文飾したるの象なり、吾人願くは日本の山林に付て亦た如此く辨ずるものゝ出んとを、見聰請ふ眼を擧て各所に水害の汎濫たるを見よ。

○清國人の義捐

福岡佐賀兩縣下洪水に付難民救助の爲め、清國上海の紳士施善昌、王杉森、陳維燕、經元善の四氏より義捐金一千弗を送附せられたる由、謹んで厚志を謝し、四海同胞の仁心いよく膨張するを賀す。

○公　園

公園の清不清、快不快は、啻に大ひに市民の氣風に關係あるのみならず、亦以て其氣風如何んを驗知するの標準たるべし、東京市中の諸公園には、無用なる官舍らしきものゝ造立せられたるもあり、周邊に馬場を造りて全く風景を殺したるもあり、特待せらるゝ料理茶屋が我物顏に店を出すもあり、腰を掛くると其儘茶を持來りて貧民に安座せしめざるものあり、而して此等の景況を見て怒るもの未だ

管てあらず、故に吾人は公園使用料の改良を望まずして、先づ其使用法の改良あらんとを請ふ、上野を見よ、淺草を見よ、芝を見よ、風景尤佳、幽邃尤極、の處ろに至りて、抑そも人の遊ぶものさ家の立つものさ、其の何れか多きを問へ。

○佛國女權議會

六月二十五日より佛都パリに於て女權議會あり、英國、ノルエー、スエーデン、デムマーク、伊太利、ポーランド、ホンガリー、及び合衆國等の委員も同席したり、最初此等外國の委員をも常議員の内に合すべきやの議論盛んなりしが、遂に之を列席せしむるとに決し、扨て會長デレースム女史の演説あり、女史は云ふ、女性中正に之より大改革を要す、然れども此の改革はダイナマイトを以てにあらず、極めて平和的の手段を以てなり、……女子の自由を得るは、平和を進め道德を高むるとに於て大ひに社會に益あり、彼の大帝王國の屢ば敗滅したるは何故ぞ、一に道德の腐れしによる、而して何により其道德は腐れしやと云ふに、此れ其國に良婦人の勢力なくして、惡婦人の手段巧みに行はれたるに由る、故に此議會は良婦人に正當の地位を與へて其感化を盛んにせんさするに在りと云々、翌二十六日は慈善事業と婦人の勢力に付き。廿七日は各國女子の醫業報酬に付き。二十八日は道德上の事に付き。二十九日は社會上女子の位地を進むるの方案に付きて討論ありし。

因に云く、別に博覽會に際し、政府の命によりて設立したるものあり、商工殖民省大臣之を監督す、而して別に民立の女權會なるものあり即はち本文に謂ふ所ろのもの也、事情あつて斯く兩々相立したるが毫も競爭的より成りしものにあらず。

外報

○遞送女局長　米國ケンタッキー、ルイスビルの遞送局長はトムプソンさ云ふ八十才の婦人なるが八年間此役に勤務し年俸四千弗を受け、米國中にも有名の事務家なる由。

○クラ、バートン　普魯士亞國著名の賞牌を鐵十字章さ申すが、米國人中之を受領し帶するものは慈善婦人クラ、バートン女史一人なり。

○黑婦人　米國セント、ルイに在る黑婦人四十三人はハーパー基督信徒婦人青年會さ云へるを起し、昨年中に千三百十一弗餘を寄捐募集し、或は孤兒院を建て、或は病院製造所を見舞ひ、又多くの文書を配布したり。

○トルストイ夫人　魯士亞小說家トルストイの夫人は百方其良人を助け、良人の著書賣買の事務を總督し、且つ十三人の子を養育せり。

○米國婦人會　の活潑さを示さんにフヒラデルフヒア婦人青年會の會舘書記マリチン、ヤング孃が昨年中自書して應答音信したる手紙斗りにて六千四百十三通なりさ。

内地

○救恤金下賜　奈良縣水害の趣聞食され御救恤の思食を以て去廿六日　皇帝陛下より金千圓　皇后陛下より同金三百圓を下賜遊ばされたり。

○田村武治氏　同氏は去年末米國より歸朝し專ばら女子教育及び幼稚園擴張の事に計畫盡力せらるゝと淺からず横濱フェリス女學校築地十三番女學校大坂一致女學校等より校長幹理などの委囑ありしも思ふ所あるよしにて之を謝し專ばら獨立平民的の校舍を新設せられんさするの都合なりしが本年恰かも徴兵適齡にして且つ其籤に當られしかば本年十一月より入營せらるゝとゝなりぬ、吾人之を壯送し又た其の出營後の運動必らず盛んならんとを望み祈る。

○水野系女史　鳥居坂英和女學校を辭し山縣伯夫人に教授し且つ獨立女學校の創立に盡力せられたるが今夏高等女學校の懇望により暗に野勢榮君に代りて同校教員の中に列せられたり。

○婦人衛生會總集會　同會にては明一日午後一時より一つ橋外帝國大學講義室に於て第三總集會を開く由にて同日には同會員長井長義、櫻井郁次郎、兩氏の衛生上の演說ある趣きにて右了りて會頭一名、副會頭一名、幹事五名の改撰をなすさ云ふ。

○博濟孤兒院　は此度筑前上座郡比良松に於て創立せらる其旨趣は彼の薄命の孤兒を救養して罪禍に陷るを防ぎ各自適當實業を授けて人生の幸福を全からしめんさの希望より出てしよし之れが會員たるものを三種に分ちて壹圓以内の金額を毎月出金するものを通常會員、同く壹圓以上のものを名譽會員、一時に金五圓以上捐棄するものを特別會員と稱すさ又た入院の孤兒は三歳より滿七歳迄とし文部省普通教育法に從ひて之を教育し一定の實業を授け獨立自治の道を教ふるよし其發起者は江藤正澄、篠崎一郎、上村初五郎、西卓爾の諸氏なりと報道ありたり云々基督教新聞に見ゆ

○神戸婦人會の事業　同會は四年以前神戸多聞兩教會の有志婦人の組織せしものなるが會員諸姉は其第一着の事業さして一の幼稚園を設けんさ或は手藝をなし或は其利益を寄附し或は音樂會を開きて其所得を貯ふるなさ百方盡力せしに本年に至り其金積で數百圓の額さなりたれば更に有志家の寄附を求め遂に地を中山手通り五丁目なる高燥にして空氣清き邊にトし爰に頌榮幼稚園さ稱する一園を設け來る十月を以て開園する事さはなりぬ之に從事せらるゝは米國の幼稚園專門家ハウ孃さ熟練なる本邦保姆數名なり且本園は單に市内の幼兒を保育するのみならず完全なる保姆を養成するの目的を以て廣く有志の諸婦を募集し保姆傳習所を開設すへし(長田氏報)。

○神戸女子手藝學校　同校も漸く隆盛に趣けるが當秋よりは關西女學校にて洋服裁縫專門科を卒業せし上島琴婦を聘し尚文學科の教師をも增聘し一層擴張せらるゝ由。

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

○女生徒募集廣告

當校今般從來ノ組織ヲ一變シ教授上學年上大ニ改良ヲ加ヘ殊ニ和漢學ノ程度ヲ進メ併セテ歷史地理物理化學博物化學生理家政育兒法等ニ力ヲ用ヒ卒業後將來社會ニ出テ婦女ノ務ヲナスニ當リ實地ニ應用スルヲ以テ養成ノ主眼トス有志ノ者ハ來學アレ
望ノ者ニハ本邦書ヲ教授ス教員西洋人四名本邦人七名九月十二日十三日ニ入學試驗ヲ行フ詳細ハ當校ニ就キ或ハ書面ニテ問合セラルヘシ

明治二十二年八月

築地新榮町三十八番館

立教女學校

生徒募集廣告

今般本科受驗科生募集候條尋常師範中學高等小學校體操教員志願者九月二十五日限リ願書差出ス可シ

本郷區駒込追分町

私立 **東京體操傳習所**

今般高等科前期普通科前期後期男女子共募集候條志願者九月廿五日限願書差出ス可シ
但兩校規則ヲ望ム者ハ郵劵四錢ヲ要ス
從前之通リ兩校ノ學科兼修スルヲ得可シ

本郷區駒込追分町

私立 **東京唱歌專門學校**

女生徒募集廣告

本館九月十日始業シ和漢學、英佛獨語、史學、普通科學、音樂、書學、裁縫、編物等女子必用ノ科程ハ總テ之ヲ教授ス（本館規則ヲ見ヨ）寄宿舍ニハ教頭オルドリッチ孃及本邦女教師同居シ起臥出入總ノ充分ノ注意ヲ爲ス入學志願者ハ願書ニ履歷書ヲ添ヘ本館事務所ヘ申込ムベシ

麹町區上六番町十七番地

開成女學館

生徒募集廣告

本校々舍新築落成ニ付本科豫科生共入學ヲ許ス志願者ハ至急申込アルベシ但九月六七ノ兩日入學試驗ノ事

橫濱山手百七十八番

フェリス英和女學校

美人發行の廣告

頗ル美本一部定價六錢十部前金五十五錢廣告一行金八錢

今度弊舍より毎月十日と廿五日の二回（初號は八月廿五日）發刊いたします美人と題する雜誌は廣く世の御婦人方の教育上に付き極く爲になる論說、誡めとなり心得となり又樂みとなる雜報、文學、技藝、歌舞、音曲の事を丁寧に記した批評、又其の故實由來を說いた考證、讀んで爲めになり又た見事な繪の這入つたおもしろい小說、貞操の摸範となる賢女烈婦の傳記 衣服裝飾の流行又は手藝の栞となる報道、及びお慰みになる詩歌、俳句、今樣等を載せたる世の御婦人方のお爲めになる雜誌です、又た此の雜誌を賛成して寄稿をされます方々は

大阪特別寄書家

羽山菊醉（毎日新聞記者）
渡邊台水（毎日新聞主筆）
宇田川文海（朝日新聞記者）
山田淳子
淺野乾坤（關西日報記者）
宮崎三昧（朝日新聞記者）
翠峰女史
西村天囚（大坂公論記者）
久津見蕨村
野崎左文（東雲新聞記者）
藤田軌道（安藝津新報主筆）
彩園女史
森本石山（關西日報記者）
（いろは順）

東京特別寄書家

饗庭篁村（讀賣新聞記者）
加藤瓢平（仝上）

の諸大家先生ですから御婦人方は申すまでもなく、殿方でも讀まねばならぬおもしろくて爲めになる雜誌です、と云つても決して自負ではありますまい

明治二十二年八月

大坂東區農人橋一丁目二百三番屋敷

發行所 **美人舍**

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

保姆傳習生募集廣告

本所ハ幼稚保育ニ老練ナル米國ハウ女史及本邦人數名ヲ聘シ完全ナル保姆ノ教授ヲナス所ナリ今般神戸頌榮幼稚園内ニ教場ヲ新築シ來ル十月上旬ヨリ開業シ寄宿生通學生ヲ募ル望ノ方ハ至急御申込アレ
但規則書入用ノ方ハ郵券貳錢ヲ送ラルヘシ

頌榮保姆傳習所假事務所
神戸市下山手通六丁目六百五番屋敷ノ一
横田勝治

女生徒募集廣告

九月二日ヨリ始業ス因テ各科ヘ入學ヲ許ス學科ハ内外國教師數名ニテ和漢學英學算術男女和洋服裁縫編物等ヲ教ユ規則書望ノ方ハ郵券貳錢送ラルヘシ

神戸市阪本村八ノ宮ノ上
女子手藝學校

東洋英和女學校計畫一斑

當校暑休ノ為六月廿九日閉校來ル九月七日開校寄宿生ハ當日入舍通學新入生ハ同九日入校アルベシ
當校ハ我日本ノ婦女子ニ更ニ高尚完全ナル教育ヲ授ケンカ為メ從來ノ普通科學期ニ更ニ二年ヲ加ヘ高等科ヲ設ケ特別ニ數學簿記和漢文學地理歷史心理學教育學等ヲ教授シ英語科中ノ數學ハ之ヲ止メ其時間ハ英文學及ヒ作文ニ用ユベシ此改正ハ文部省教員學力檢定試驗ヲ受ケ教員免狀ヲ得ント欲スル者ニハ殊ニ便利ニシテ甚好都合ナルベシ
所望者多クシテ一級ヲ編成スルニ足レバ別ニ彩色及繡鳥ノ科ヲ設クヘシ
且教師ヲ増加シテ充分適當ナル教員ヲ持續センヿヲ勤ムベシ
又九月ニハ新ニ科程規則ヲ定メ上梓シテ配布スベシ
現今ノ規則書ヲ望ム者又其他照會ヲ欲スル者ハ左ノ處ニ書翰ヲ投シ或ハ自ラ御出頭アリタシ

明治廿二年八月

麻布東鳥居坂町十四番地
東洋英和女學校

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町甚明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文春堂○同橫濱住吉町角田晏貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西内大工町新町々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年八月二十九日印刷
明治二十二年八月三十一日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

發兌

八月。三日 十日 十七日 廿四日 卅一日
九月。七日 十四日 廿一日 廿八日
十月。五日 十二日 十九日 廿六日
十一月。二日 九日 十六日 廿三日

定價

一册。六錢 郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。五十八錢郵税。十錢（同前）
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

一行（廿七字詰）一回 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six month *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.